

京都の聖域における道と結界の意匠に関する研究

— 妙心寺の参道網を対象として —

Design Research on Ritual Paths and their Boundaries of precinct in Myoshinji Temple

川崎 雅史*1、山田 圭二郎*2、小林 昌季*3、森 啓年*4

by Masashi KAWASAKI, Keijiro YAMADA, Masaki KOBAYASHI, Hirotooshi MORI

1. はじめに

(1) 道が形成する聖域空間

本研究が対象とする妙心寺は、広大な敷地の中に数多くの塔頭が集積し、そこへ通じる参道が網の目のように形成されている。あたかも都市を連想させるようなこの参道網は、その多くが塔頭の土塀や石垣、境界となる植栽等の他属的な要素によって形成され、現在でもなおある秩序をもった自立的な意匠を観察することができる。参道は起点から段階的な変化を示し、やがて塔頭内部の建築や庭園空間へとつながり、聖域の中心部へ至る。このような道は、広大な禅宗寺院の聖域空間をつなぎ、あるいはその実体の多くを構成する主要な空間要素になっていることに特徴がある。

近年道空間のあり方がアーバンデザインの一つの潮流として着目されその意匠の記述が展開されている中で^{1) 2)}、「日本の都市空間」³⁾以来十分な蓄積のない、わが国の伝統的な道の意匠の固有性を記述することは、実践的なみちのデザインコンセプト形成へ少なからず貢献するものと考えられる。

(2) みち空間を形成する要素 一道と結界一

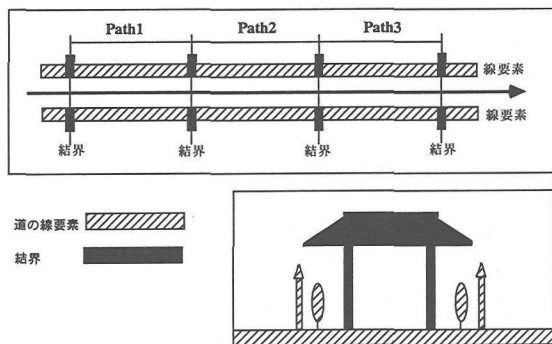
本研究が調査対象とする伝統的な道の空間は、大きく2つの要素から構成されていると考えて意匠の分析を試みた。一つは、道は物理的にとぎれること

のない連続であり、主として、土塀、舗装、植栽などの連続した線の要素で形成される。さらにその上にあって景観変容のある所に、門や点植栽などの境界の要素が存在する。これらの要素は空間を物理的に遮断することなしに視覚的あるいは精神的な境界を明示する役割をもち、空間を分節化する「結界」として把握する(図1参照)。本研究ではこのような連続的な道と結界によって形成されるみちの空間が、聖域空間を統括する核心的要素になっていると考えて分析を進めた。

(3) 研究の目的

本研究は、次のように妙心寺境内における伽藍・参道と塔頭内部の道とその結界要素を網羅的に記述し、参道網の意匠構造の外郭を明らかにすることを目的とする。

- 1) 敷地と参道網の形成過程 (2章)
- 2) 伽藍・参道における道と結界の意匠 (3章)
- 3) 塔頭内部における道と結界の意匠 (4章)
- 4) 結論—参道網の意匠構造— (5章)



Key Words : 景観、空間整備・設計、結界、妙心寺

*1 正会員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科 助教授

*2 正会員 修士(工) 京都大学大学院工学研究科 助手

*3 学生会員 京都大学大学院工学研究科

*4 正会員 修士(工) 建設省土木研究所

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel & Fax 075-753-5122

図1 道空間の概念(道と結界)

2. 敷地と参道網の形成

(1) 妙心寺の概要

妙心寺の敷地は、東西の河川（宇多川と西の川）が、また南北は石垣と土塀が敷地の境界に位置している。境内への正式な入口は敷地の南北に存在し、南に勅使門、南惣門、北に北惣門がある。妙心寺山内は仏殿、山門等が存在する伽藍領域、塔頭が立ち並ぶ塔頭街、伽藍領域と境内の37塔頭を結ぶ参道空間で構成されている。全ての塔頭は敷地を塀で囲み妙心寺内で独立な寺院として成立している。

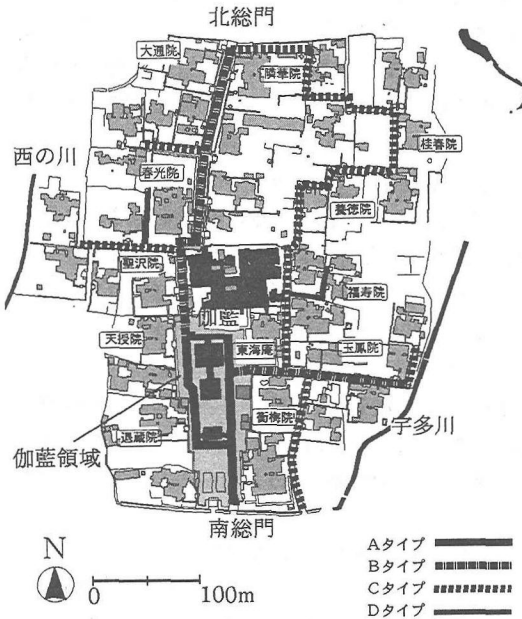


図2 参道網全体図

(2) 敷地と参道網の形成

妙心寺山内の参道網は、伽藍領域より北には南北を貫く2つの骨格となる参道がある(図2参照)。

西側の参道は伽藍領域から春光院、大通院の横を通過し北門に抜ける参道であり、伽藍領域と北門を直線で結んでいる。東側の参道は玉鳳院と東海庵の間から始まり北門に抜ける参道で、多くの折れ曲がり有する。この2本の参道は、妙心寺の塔頭建立が頻繁に行われ敷地が北へ拡大する戦国末期から近世初期の時代に形成された参道でありながら形成過程が異なる。東の参道は養徳院の敷地が同族塔頭に敷地分与される過程で形成された参道であり、西の参道は伽藍領域と北惣門を結ぶ直線上に塔頭が隣接して順次建立されたことにより形成された(本研究

では歴史的な文献資料を用いてその形成過程について調査した)。それぞれの参道の線形の差違は、この形成過程に依存している。

妙心寺山内の参道は、この骨格の参道をベースにして枝葉の道にいくにしたがって多くの折れ曲がり有する複雑な線形となっている。しかし、そのつながり方をみると、伽藍領域から北惣門まで放射状に順次派生して全ての塔頭の表門を結ぶ、ツリー状の階層的なネットワーク構造を有することがわかる。

3. 伽藍・参道における道と結界の意匠

(1) デザインサーベイの実施

意匠調査の内容は、道の基本骨格としての断面図の作成(実測データ)、連続的なみちの要素である参道敷石、土塀、植樹配置、および結界要素としての表門等の写真収集とディテールの図面化を全数的に行った。

(2) 参道網の分節(図2参照)

前章より、参道網は伽藍領域を中心としそこから放射状に東西、南北に延びる参道を軸として構成され、ツリーシステムであることがわかった。道の意匠の傾向を把握するために伽藍領域を起点として、順次派生する参道をつぎの4つに分節して観察を進めた。(タイプ名をA, B, C, Dと設定した)

- 1) 南惣門と伽藍領域を結ぶ中心骨格的な参道。
- 2) Aタイプの参道から派生し、放射状に東西、南北に伸び、伽藍領域と北惣門、旧門を結ぶ基軸的な参道。
- 3) Bタイプの参道から派生し、主に塔頭街を通過する塔頭間参道(Cタイプ)
- 4) Cタイプの参道から派生し、突き当たりにいたる袋小路(Dタイプ)

(3) 連続的な道の要素に関する意匠の特化

(a) 敷石の意匠(図3参照)

妙心寺の敷石デザインは23種類存在した。大別すると、敷き方は、切石敷(15種類)、寄せ敷(4種類)、自然石敷(4種類)に分けることができる。とくに切石敷の数は多く、市松敷、煉瓦敷、短冊敷等を観察することができた。

敷石の意匠は切石敷、寄せ敷、自然石敷の順に要素の省略が起こり、要素が密から疎になった。また、

目地の変化は市松敷から煉瓦敷、短冊敷への移行により目地のずれがおこる。これは意匠の幾何学的秩序のくずれ現象と見なすことができる。日本デザイン論⁷⁾では、真行草への対応を敷石において言及しているが、本対象においてもAからDの流れにおいて整然とした幾何学的意匠から自然的な模様への移行が観察できた。

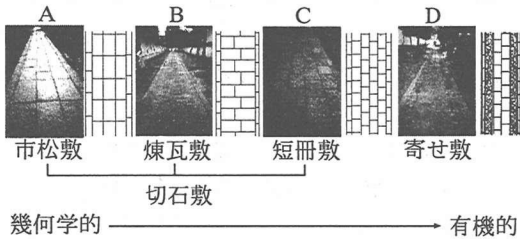


図3 敷石の意匠

(b) 塀の意匠 (図4参照)

105の異なった塀に対して、壁部分と屋根部分の意匠の組み合わせとみなして、以下の意匠観察を行った。壁部分は、定規筋のある・無しで分かれ、定規筋が入った壁は皇室と関係がある寺院のみが使用することが許され、格式が高いことを示す。さらに多くは柱が入り幾何学的な意匠となる。定規筋が無いものは、漆喰壁と土壁が見られた。定規筋のある壁は中心参道、基軸参道(A、B)の参道で使われ、土壁は主にC、Dの参道で使用されている。漆喰壁は全ての参道で多く用いられている。

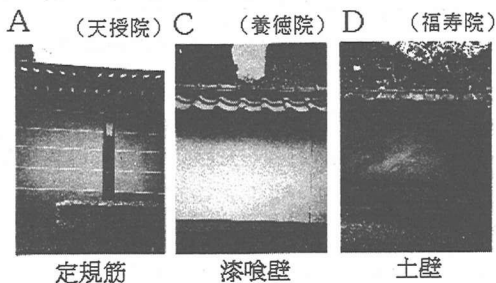


図4 塀の意匠 (壁部分)

屋根部分の意匠は、本瓦葺き、棧瓦葺き、平板瓦葺きの3つに分かれた。本瓦葺きはA、Bの参道で多く使用され、棧瓦葺きはB、C、Dの参道で主に使用されている。また平板瓦葺きはDの参道に観察できた。

以上の意匠は、定規筋にある幾何学的な意匠から、輪郭線が減少していき素朴な自然的な意匠への変化

と理解することができる。

(c) 植栽

Aの参道沿いの植樹は生け垣を除いて全て高木の松を定間隔で植栽している。Bでは塀と参道の間に敷地を持ち、水路を並置しているものがあり、修景と転落防止のため中低木の整形植栽が線的に設置され、道の輪郭をつくる。Cの参道上の植樹は主に生け垣であり、各塔頭の表門へのアプローチに演出として用いられ、表門近辺、もしくは表門が面する参道の直線部分のみに植樹が施されている。各塔頭ごとに異なる意匠となっている。Dでは整形でない多様な植栽が密に配置され、線の骨格を失い庭園的な意匠が観察できた。整形的な意匠から庭園的な意匠への変化を捉えることができた。

(4) 結界の意匠

(a) 表門 (図5参照)

妙心寺内の各塔頭の入口にある表門は、参道空間と塔頭の敷地内部を分節化し同時につなぐ要素である。そのほとんどが薬医門の形式であり参道は舗石道で結ばれている。この表門付近は、必然的に参道と塔頭敷地内の異なった空間が接続する急激な変化の緩衝部分に位置する結界の領域となる。多くの表門は、塔頭の敷地と参道の境界線より後方に門柱を配置する形で作られている。門柱の位置を塔頭の敷地の内部に引き込むことで、舗石道の距離を長くし、表門の面積も大きくとれるので、緩衝領域に配慮した大きな表門が可能となる。よって門柱が敷地内にどれだけ引き込まれているかを考慮して、

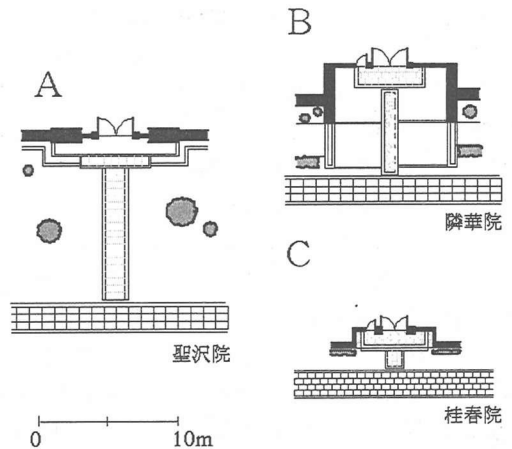


図5 表門の意匠

舗石道を含む参道から表門までの平面様式に着目して、妙心寺内に存在する43塔頭について観察を行った(参道から門柱までの距離、舗石道の長さ、門柱が敷地内に引き込まれている長さに着目して整理した)。A、Bの参道にある表門の形態では門柱が敷地内に大きく引き込まれ、参道から表門まで長い距離を確保するとともに、門の左右に塀が突き出て小広場のな空間をつくり、両対の高木松も観察できた。C、Dの参道では、舗石道は短く緩衝領域は小さく設計された形式が観察できた。自然石舗装の土落としの部分参道と分節する要素となっている。

(b) みちの折れ曲がり

各タイプのみちの接続部分は折れ曲がりになっている所がほとんどである。そこは、塀が道のアイストップとなり、境界としての役割を果たす。

(5) まとめ

道の連続的な要素に関する大きな傾向として、秩序感のある幾何学的な意匠から、自然に近い有機的な意匠への漸次的な変化を観察することができた。

4. 塔頭内部における道と結界のデザイン

公開の許可されている退蔵院、桂春院、春光院、衝梅院を対象に、建築内部以外の庭園について網羅的に道と結界の意匠を調査した。

(1) 表門から建築玄関の道と結界

表門と塔頭玄関の間には前庭がある。ここを通る道は低木の植え込みで囲まれ、直線もしくは大きな折れ曲がりのある線形をもつ。舗装の意匠は、自然石と切石を組み合わせる敷寄せ敷が観察できる。この折れ曲がり、小さな空間の中に道の存在を感じさせ、スケールの急激な変化を緩和させる。ここでは、塔頭の玄関と隣接する高木の松等が境界的な要素として存在し、脇口には内部庭園への入口として、塀・垣があり、内部を垣間見ることができる。

2) 庭園・茶室をむすぶ道・露地

表門と茶室をむすぶ道・露地では、寄せ敷と自然石配置が観察できた。線形がくずれ、庭園と一体化した自然配置のみちの意匠が形成されている。門や垣根、窓のある壁、小さな折れ曲がりによって、庭園と庭園、庭園と茶室を細やかに分節化する多様な結界が観察できた。小さな敷地の中で空間の変化を演出する装置として多様な結界が効果的に設置さ

れていることがわかった。

5. 結論—参道網の意匠構造—

本研究によって、参道から塔頭の中へ至るまでの広域な参道網の道と結界は段階的な意匠の変化を観察することができた。

伽藍・参道においては、中心的な参道から基軸的な参道、塔頭間参道、袋小路に向かう過程で幾何学的な意匠から自然に近い有機的な意匠への変化を観察することができた。結界は表門と大きな折れ曲がりにより集約された。

塔頭内部の道と結界においては、小さなスケールの中で同様に幾何学的な意匠から自然的な意匠への変化を観察することができた。結界は門・垣根・曲がりによる多様な形で密に配置されていた。

以上の観察から、妙心寺の道空間は、伽藍・参道領域と塔頭内部とにおいて2重的(入れ子的)な意匠構造をもつことが推察できた(図6参照)。

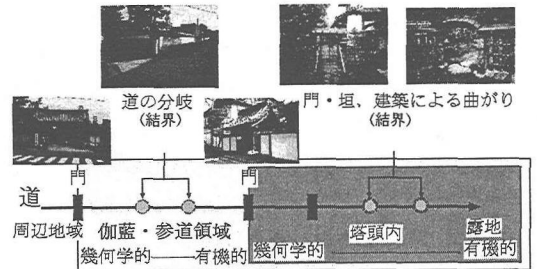


図6 妙心寺参道網の意匠構造

京都大学土木システム工学専攻中村良夫教授には、結界の考え方をはじめ研究の根幹に関わるご指導を終始頂いたことを深く感謝いたします。

参考文献・引用文献

- 1) Allan.B.Jacobs, "Great streets", The MIT Press.,1996.
- 2) Michael Southworth, "Streets and the Shaping of Towns and Cities", 1997.
- 3) 日本の都市空間、都市デザイン研究体著、彰国社、1995
- 4) 正法山誌、無著道忠撰、思文閣、1975
- 5) 妙心寺、萩須純道/竹貫元勝共著、東洋文化社、1977
- 6) 日本庭園の手法・第5巻・露地、重森 完途、毎日新聞社、1976
- 7) 日本デザイン論、伊藤ていじ著、鹿島出版社、1991